

高野山密厳院石造物調査報告

——萱堂聖覺心上人の五輪塔群と大和国箸尾莊惣墓五輪塔——

木下 浩良

一・はじめに

高野山の塔頭寺院の一つとして法灯を繋ぐ密厳院の境内に、中世に遡る石造物が多数遺存することは、筆者が高野山大学国史学専攻の学生時代の昭和五十五年（一九八〇）頃より知っていた。振り返るとそれは、同院へ所用で訪問した際に、偶然にその石塔群を拝見したことによる。この時に、同院石造物中最古の在銘品である後述の元弘三年（一二三三）五輪塔を見出したが、その銘文は『紀伊国金石文集成―続編―』に紹介された。^{（註1）}

その後、『高野町史』民俗編（平成二十一年刊）の「石造物編」を執筆の際に、在銘品の確認に同院を来訪して、後述の一連の上人号の銘文がある五輪塔の概略を調査させていただいた。

さらにこの度、令和四年（二〇二二）同院御住職の徳富義明師の特別の許可を得て上人号の五輪塔の他の石塔類全部の詳細な調査の機会を得たのであった。

本稿にて紹介するものは、その密厳院の在銘品の石造物である。中世の紀年を有する在銘品十八基が見出された。注目されるのは副題にも記したように、高野聖の中でも萱堂聖の石塔群が発見されたことと、高野山に地方からの惣墓造立の事例が見出されたことである。詳細は後述するが、高野聖の石塔造立の事実と、高野山における石塔造立の背景を知る貴重な発見となった。

以下、高野山密厳院における在銘石塔について順に紹介して、若干の考察を述べてみたい。石塔は、上人号のものが密厳院の境内の東隅に南北に前後二列に並べられていて（写真1・2）、その他の石塔がその二列の南側にまとめて配置されている。

二・萱堂聖覚心上人等の上人号の銘を有する五輪塔

①鎌倉時代末～南北朝時代の五輪塔（写真3・4）

砂岩製。地輪・水輪・火輪・風空輪と四石造りの五輪塔であるが、地輪以外は別物で、寄せ集めの塔となっている。梵字の配置は「ア・ビ・ラ・カ・キヤ」である。地輪は下部が土中に埋まっている。現状の地輪の法量は、幅五〇cm、高さ二七cmである。地輪正面には、

□□上人

（ア）

と陰刻銘文がある。名前は明らかにしていないが、上人号を有する僧侶のために造立された五輪塔である。地輪底部が埋まっている、数cm程が埋没していると思われる。そうすると、高さに対する幅の比率が一对二に近く、重厚な地輪の数値となり、碑面の造りの重厚さと合わせて、銘文はないものの中世でも鎌倉時代末～南北朝時代の五輪塔と推定する。

②鎌倉時代末～南北朝時代の五輪塔（写真5・6）

砂岩製の地輪と別石の緑泥片岩製の水輪と時代が下った室町時代の砂岩製の火輪を乗せる。地輪以外は別物で、寄せ集めの塔となっている。地輪の法量は、幅五〇cm、高さ三三cmである。地輪正面には、

□阿上人

（ア）

二十月廿三日

と陰刻銘文がある。名前は一文字明らかにしてないが、□阿上人と称する僧侶のために造立された五輪塔である。法量は先に紹介した①のものとはほぼ同じ数値で銘文の手法も酷似していることから、この両者は同時期に造立されたものと推定される。年号は欠落するが、某二年十月二十三日の年月日を刻する。

③元弘三年（一二三三）五輪塔（写真7・8）

砂岩製の地輪と別石の緑泥片岩製の水輪と時代が下った室町時代の砂岩製の火輪を乗せる。地輪以外は別物で、寄せ集めの塔となっている。地輪の法量は、幅四六cm、高さ三三cmである。地輪正面には、

覚心上人

（ア）

元弘三年五月十八日

と陰刻銘文がある。鎌倉時代最末の元弘三年（一二三三）五月十八日の紀年がある、覚心上人のために造立された五輪塔である。密厳院に所在する石造物中、最古の在銘の遺物である。

④応永二年（一三九五）五輪塔（写真9・10）

砂岩製。地・水・火・風・空の各輪とも有するが、地輪以外は別物である。梵字は「ア・バ・ラ・カ・キヤ」を刻する。総高は一〇七cm。地輪の法量は、幅三八cm、高さ二五cmで、地輪の下部は土中に埋まる。銘文は地輪正面に、

□阿上人

（ア）

應永二
十
五
月

と陰刻銘文がある。室町時代初期の応永二年（一三九五）四月十五日の紀年がある、名前は一字明らかでないが、□阿上人と称する僧侶のために造立された五輪塔である。

⑤ 応永十年（一四〇三）五輪塔（写真11・12）

砂岩製。地・水・火・風・空の各輪とも有するが、地輪以外は別物である。梵字は「ア・バ・ラ・ウーン・ケン」を刻する。総高は一二六cm。地輪の法量は、幅四八cm、高さ二三cmで、地輪の下部は土中に埋まる。銘文は地輪正面に、

□阿上人

（ア）

応永十七二

と陰刻銘文がある。室町時代初期の応永十年（一四〇三）七月二日の紀年がある。名前は一字明らかにしてないが、□阿上人と称する僧侶のために造立された五輪塔である。

⑥ 応永十七年（一四一〇）五輪塔（写真13・14）

砂岩製。地輪の上に大小の二つの水輪を置くが、地輪以外は別物である。地輪の法量は、幅四七・五cm、高さ三三cm。銘文は地輪正面に、

用阿上人

（ア）

應永十七二十五

と陰刻銘文がある。室町時代初期の応永十七年（一四一〇）二月十五日に、用阿上人という僧侶のために造立された五輪塔である。二月十五日は、釈迦が入滅した涅槃会の日である。おそらくは、用阿上人は自身の逆修供養の日を涅槃会に当てて、本五輪塔を造立したものと推察する。

⑦嘉吉三年（一四四三）五輪塔（写真15・16）

緑泥片岩製。地輪の上に大小の二つの水輪を乗せるが、地輪以外は別物である。地輪の法量は、幅五〇cm、高さ三七cm。銘文は地輪正面に、

第六世覺心上人

（ア）

嘉吉三年二月時正

と陰刻銘文がある。室町時代中頃の嘉吉三年（一四四三）二月時正の日に、第六世覺心上人のために造立された五輪塔である。時正は彼岸中日のことで、おそらく第六世覺心上人は自身の逆修供養の日を春の彼岸中日に当てて、本五輪塔を造立したものと推察する。

⑧寛正六年（一四六五）五輪塔（写真17・18）

緑泥片岩製。地・水・火の各輪は一具である。空風輪は別物で砂岩製となっている。梵字は「ア・バ・ラ・カ・キヤ」を刻する。各輪の法量は以下のようである。地輪の幅五二cm、高さ二八cmで、地輪の下部は土中に埋まる。水輪の高さ四六cm、上端幅二四cm、最大幅四九・六cm、下端幅二四・六cm。火輪の高さ三〇cm、上端幅一九・四cm、最大幅四八・四cm、軒中央高さ九cm、軒両端高さ一二cm。空風輪の高さ三三cm。総高一三七cmを計る。銘文は地輪正面に、

七代覚心

(ア)

寛正六年^{乙酉}八月

と陰刻銘文がある。室町時代中頃の寛正六年（一四六五）八月に、第七世覚心上人のために造立された五輪塔である。

⑨延徳三年（一四九一）五輪塔（写真19・20）

砂岩製。地輪の上に水輪を置くが、水輪は別物である。地輪の法量は、幅五〇cm、高さ三七cm。銘文は地輪正面に、

第八世覚心上人

(ア)

辛

延徳三年二月

亥 三日

と陰刻銘文がある。室町時代中頃の延徳三年（一四九一）二月三日に第八世覚心上人のために造立された五輪塔である。

⑩永正二年（一五〇五）五輪塔（写真21・22）

緑泥片岩製。地・水・火・風・空の各輪とも有するが、地輪以外は砂岩製で別物である。梵字は「ア・バ・ラ・ウーン・ケン」を刻する。総高は一二六cm。地輪の法量は、幅四八cm、高さ三二cmで、地輪の下部は土中に埋まる。銘文は地輪正面に、

第九世覺心上

（ア）

乙

永正二年十二月

丑

と陰刻銘文がある。室町時代中頃の永正二年（一五〇五）十二月に第九世覺心上人のために造立された五輪塔である。

⑪ 天文五年（一五三六）五輪塔（写真23・24）

砂岩製。地・水・火・風・空の各輪とも有するが、地輪以外は梵字の書体やタイプが違っていて別物である。梵字は「ア・ビ・ラ・ウーン・ケン」を刻する。総高は一四五cm。地輪の法量は、幅四八cm、高さ三二cmで、地輪の下部は土中に埋まる。銘文は地輪正面に、

第十世覺心上

（ア）

天文伍年五月

と陰刻銘文がある。室町時代後期の天文五年（一五三六）五月に第十世覺心上人のために造立された五輪塔である。

三、大和国箸尾荘惣墓五輪塔（写真25・拓影1）

本石塔は、前記の萱堂聖覺心上人等の上人号の銘を有する五輪塔群の、南側隅に集められた中世石塔の断片を集められた中より見出された。五輪塔の地輪部のみの残欠品である。砂岩製。法量は幅三二・六cm、高さ二五cm、上面中央に水輪の柄を受ける

径七cm、深さ一・四cmの柄孔をうがっている。地輪正面には、

大和国為箸

尾庄貴賤上

下惣墓也

(ア)

願主

明德三七月日

成阿敬白

と陰刻銘文がある。南北朝時代末年の明德三年（一三九二）七月に造立された、大和国箸尾庄惣墓五輪塔である。造立に際しての願主は成阿だと明らかにしている。惣墓を高野山に造立したもので、これまでの高野山において見出された石塔銘文にはない、惣墓として造立された五輪塔である。

惣墓とは当該地域の共同墓地のことである。当該地域に形成されるのが惣墓であり、それを遠方の高野山に設けたのは、萱堂聖の勧進によるものとは推察されるが、このような事例は高野山では初めての発見である。この一例をもつて高野山に造立された五輪塔全体について述べることはできないが、同様の事例がこの当時の高野山の石塔造立にもあったのではなからうか。惣墓は当該地域に必ずしも設けられるものでもなかったことが、判明された。高野山という霊場に惣墓を造立していることに注目したい。

箸尾庄は、現在の奈良県北葛城郡広陵町付近にあった荘園である。従来の「惣墓」の性格を見直すことになる本五輪塔は、極めて貴重である。そのため、特に本稿では一項目として取り上げた。

四、その他の石塔

① 康永二年（一三四三）五輪塔（写真26・拓影2）

砂岩製。地輪のみの残欠である。法量は、地輪高さ二四cm、幅三〇・八cm。地輪正面には、

禪尼妙阿

（ア）

願主永阿

康永第二癸未八月四日

と陰刻銘文がある。南北朝時代の康永二年（一三四三）八月四日に、禪尼妙阿のために永阿が造立した五輪塔と知られる。禪尼妙阿と永阿和は夫婦であろうか。康永は北朝方の年号である。

② 貞治三年（一三六三）五輪塔（写真27・拓影3）

砂岩製。地輪のみの残欠である。法量は、地輪高さ二〇cm、幅二八cm、上面中央に水輪の柄を受ける径四cm、深さ一・八cmの柄孔をうがっている。地輪正面には、

□□□供養之

志者

為逆修善根也

（ア）

敬

□禪

白

貞治三年十月廿五日

と陰刻銘文がある。南北朝時代の貞治三年（一三六三）十月二十五日に、人名は明らかに出来ないが某の逆修供養のために造立した五輪塔と知られる。造立者は、一字不明であるが、□禪なる人物であろう。貞治は北朝方の年号である。

③ 応安四年（一三七二）宝篋印塔（写真28・拓影4）

砂岩製。上部二段式の宝篋印塔の基礎のみの残欠である。法量は、高さ二八cm、幅三四cm。基礎の四面とも素面のままで、正面と考える一面には、

右志者為

一結 七世

悲母 成仏

應安三二月時正

と陰刻銘文があつて、その面の向かつて右側面には二字の法名の三人が十二行にわたつて刻されている。その法名は判読に苦しむが、次の都合三十六名が認められる。

□□ □□ 正□

□宗 □阿 道宗

☐ 阿	☐ 弥	☐ 阿	☐ 阿
☐ 道	☐ 弥	☐ 宗	☐ 宗
☐ 妙	☐ 阿	☐ 道	☐ 円
☐ 行	☐ 道	☐ 妙	☐ 阿
☐ 宗	☐ 妙	☐ 妙	☐ 阿
☐ 宗	☐ 貞	☐ 修	☐ 修
☐ 宗	☐ 宗	☐ 宗	☐ 宗
☐ 心	☐ 昌	☐ 宗	☐ 道
☐ 道	☐ 貞	☐ 道	☐ 円

三十六名の結集により、南北朝時代の応安四年（一三七二）二月時正（彼岸中日）に造立された宝篋印塔である。七世の母の供養のために結集された信仰集団であったことが知られる。それら三十六人は法名で列記されていることから、全ての構成員が逆修を成していたことも指摘できる。応安は北朝方の年号である。

④ 永和二年（一三七六）宝篋印塔（写真29・拓影5）

砂岩製。上部二段式の宝篋印塔の基礎のみの残欠である。法量は、高さ二〇cm、幅二四・六cm。基礎の四面とも素面のままで、正面と見える一面には、

為善阿

孝子□□

永和三三廿四

と陰刻銘文がある。南北朝時代の永和二年（一二七六）三月二十四日に、善阿のために子の何某が造立した宝篋印塔と知られる。永和は北朝方の年号である。

⑤ 応永五年（一三九八）五輪塔（写真30・拓影6）

砂岩製。砂岩製。地輪のみの残欠である。法量は、地輪高さ一五・五cm、幅二二・六cm。地輪正面には、

行阿二親

尼□□

（ア）

應永五_{十六月十四}

と陰刻銘文がある。室町時代初めの応永五年（一三九八）六月十四日に、行阿の二親ために尼の何某が造立した五輪塔と知られる。行阿と尼の何某は夫婦であろうか。

⑥ 応永二十三年（一四一六）五輪塔（写真31・拓影7）

砂岩製。地輪のみの残欠である。法量は、地輪高さ一四・六cm、幅二二・六cm、上面中央に水輪の柄を受ける径三・八cm、深さ〇・八cmの柄孔をうがっている。地輪正面には、

聖弥阿

（ア）

广永廿三二月

と陰刻銘文がある。室町時代初めの応永二十三年（一四一六）二月に、聖の弥陀のために造立された五輪塔と知られる。

⑦ 文安元年（一四四四）五輪塔（写真32・拓影8）

砂岩製。地輪のみの残欠である。法量は、地輪高さ一四cm、幅二〇cm、上面中央に水輪の柄を受ける径四・二cm、深さ一・四cmの柄孔をうがっている。地輪正面には、

意阿弥陀佛

（ア）

文安元潤晦日

と陰刻銘文がある。室町時代中頃の文安元年（一四四四）に、意阿弥陀佛のために造立された五輪塔と知られる。文安元年の閏月は六月で、同月の晦日は二十九日になるので、同日の造立となる。

⑧ 永正九年（一五二二）宝篋印塔（写真33・拓影9）

緑泥片岩製。上部二段式の宝篋印塔の基礎のみの残欠である。法量は、高さ一三・四cm、幅二〇cm。基礎の三面には輪郭を巻き、格狭間を入れる。上部に径五cm、深さ一・五cmの柄孔をうがつ。正面と考える一面は輪郭を巻き、

一如紹元

居士

七月十八日

永正九年^末
申

と陰刻銘文がある。室町時代中頃の永正九年（一五一一）七月十八日に、一如紹元居士のために造立された宝篋印塔と知られる。

五、小考

これまで、萱堂聖覚心についての史料は、応永二十年（一四一三）の「高野山五番衆契状」が知られていた。同史料より該当部分を引用すると、「近年云^シ覚心^ト荒入道、密厳院傍^ニ萱庵^ヲ結^ヒ。偏令念仏以来、号^シ高野聖、空口^ヲ負^ヒ、令諸国^ニ頭陀」と記している。^{註2}まさに、今回見出された歴代の覚心上人の五輪塔は、「高野山五番衆契状」が記す高野聖の覚心上人そのものである。

この萱堂聖覚心については、高野聖についての研究を集大成された五来重氏の『高野聖』に詳しい。詳細については同書に譲るが、萱堂聖をはじめたのは臨済宗法燈派開祖の法燈国師覚心とされている。弘安九年（一二八六）法燈国師覚心が八十歳の時に一人の俗人が弟子になりたいと願い出た。そこで法燈国師は自身と同じ名の覚心を与えて、高野山へ行って萱原で念仏せよと命じたのが萱堂聖のおこりとされている。この他、萱堂聖のはじまりについて、由良の浜の漁人または獵士説、関東武士の奈須七郎親張説、さらには滝口入道説が挙げられている。

このように、萱堂聖の始祖は諸説あるものの高野山における聖の一派として活動を広げ、特に念仏芸能にすぐれて、「かるかや」などの説経で高野山の参詣人の人気をあつめたとの説を五来氏は指摘なされている。現在も密厳院前で設けられている「かるかや」の唱導のための刈萱堂はそのことを今に伝えている。

以来、萱堂の上人は代々にわたり同じ覚心を名乗ることになり、慶長十五年（一六一〇）まで十九代までの間、代々覚心を称したとされている。^{註3}

今回、見出された代々の覚心上人の五輪塔は五来氏の研究を実証する遺物として、重要な発見となった。ここで、見出された六基の歴代の覚心上人塔をまとめると次のようになる。史料には見えない歴代の覚心上人の存在が明らかとなった。

・元弘三年（一三三三） 覚心上人

・嘉吉三年（一四四三） 第六世覚心上人

・寛正六年（一四六五） 第七世覚心上人

・延徳三年（一四九一） 第八世覚心上人

・永正二年（一五〇五） 第九世覚心上人

・天文五年（一五三六） 第十世覚心上人

さらに、覚心上人以外の、上人と称する三基の僧侶の五輪塔も見出された。これも、史料には見えない、覚心上人の他の萱堂の僧侶の姿が垣間見える。覚心上人以外にも、有力な僧侶が萱堂に存在したことが認められる。

・応永二年（一三九五） □阿上人

・応永十七年（一四一〇） □阿上人

・応永十七年（一四一〇） 用阿上人

さらに、注目されるのが、南北朝時代から室町時代にわたる在俗出家者による石塔の造立が萱堂であったことである。それら遺物はまさに、萱堂聖の活動の跡を今に伝えているものと考ええる。これも時代順に列記すると以下になる。史料には見えない、萱堂の繁栄の様子が伺われる。

・康永二年（一三四三） 善阿のための五輪塔。

・貞治三年（一三六三） 逆修供養のための五輪塔。

・応安四年（一三七一） 三十六名の結衆による七世の母の成仏のための宝篋印塔。

・明德三年（一三九二） 大和国箸尾荘の惣墓五輪塔。

- ・ 応永二年（一三九五） 禪尼妙阿のための五輪塔。
- ・ 応永五年（一三九八） 行阿の二親のための五輪塔。
- ・ 応永二十三年（一四一六） 聖弥阿のための五輪塔。
- ・ 文安元年（一四四四） 意阿弥陀仏のための五輪塔。
- ・ 永正九年（一四一六） 一如紹元居士のための宝篋印塔。

六．おわりに

最後に指摘したいのが、紹介した歴代の覚心上人と上人号を有する僧侶の五輪塔の大きさである。鎌倉時代から南北朝時代の五輪塔の大きさは、本稿で紹介したタイプのものでは妥当なものと考えて間違いないが、室町時代における通常の五輪塔のサイズとしては、三倍近くもの大きさのタイプとなっている。通常の室町時代の五輪塔のサイズは、本稿に紹介した、その他の石塔の中の四・⑥の五輪塔の地輪の高さ一四・六cm、幅二一・六cm、四・⑦の五輪塔の地輪の高さ一四cm、幅二〇cmである。

それに対して、室町時代の歴代の覚心上人の五輪塔の地輪の幅のサイズは、四七cmから五二cmであって、室町時代の五輪塔の地輪の幅が上記のものと対比すると三倍以上もの大きさのものとなっている。

このことは何を意味しているのだろうか。一つは萱堂聖の経済力の大きさと、もう一つは、萱堂聖が唱導の意味で大型の石塔造立を行っていたことではなからうか。中世における萱堂の様子は現状と違い、歴代覚心上人の五輪塔がうやうやしく祀られ、その他の上人号を有する石塔もそれに準じて祀られていて、その周りには全国からの在俗出家者の石塔が取り囲んで、言わば小さな奥之院を萱堂で形成していたのではないかと推定する。

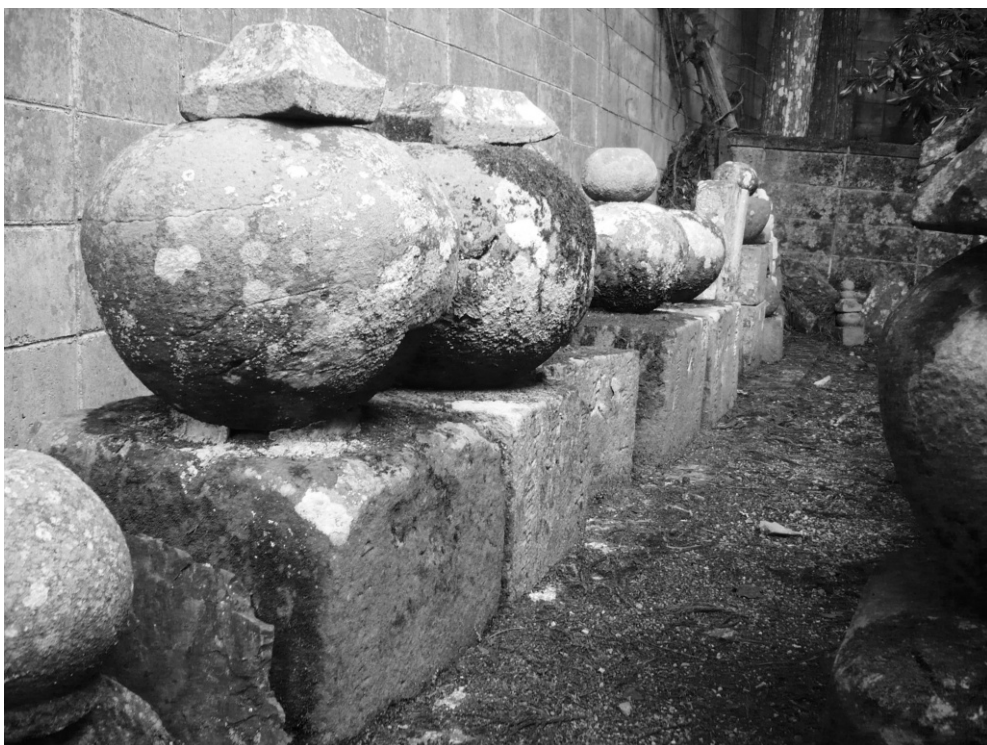
この萱堂聖と今回見出された石塔群についてはさらに研究を深めていきたい。大方の御示教などいただければ幸いである。

（註1） 巽三郎・愛甲昇寛・小賀直樹編『紀伊国金石文集成―続編―』（平成七年、巽三郎刊）
（註2） 「高野山五番衆契状」『宝簡集』三十七（『大日本古文書家わけ第一』高野山文書之一）
（註3） 五来重『高野聖』（昭和四十年、角川書店刊）

〈キーワード〉 密厳院 萱堂聖 覺心上人 五輪塔 箸尾荘 惣墓



(写真 1) 密厳院石塔群前列



(写真 2) 密厳院石塔群後列



（写真3）鎌倉時代末～南北朝時代の五塔塔全体



（写真4）鎌倉時代末～南北朝時代の五塔塔地輪



(写真5) 鎌倉時代末～南北朝時代の五輪塔全体



(写真6) 鎌倉時代末～南北朝時代の五輪塔地輪



(写真7) 元弘3年(1333)五輪塔全体



(写真8) 元弘3年(1333)五輪塔地輪



(写真9) 応永2年(1395)五輪塔全体



(写真10) 応永2年(1395)五輪塔地輪



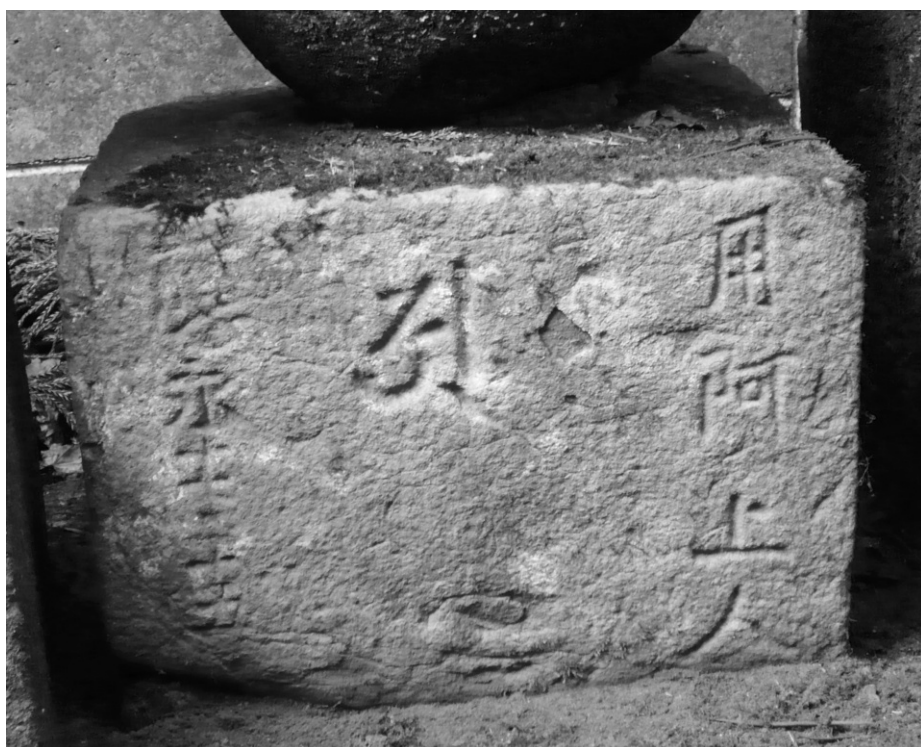
(写真 11) 応永 10 十年 (1403) 五輪塔全体



(写真 12) 応永 10 十年 (1403) 五輪塔地輪



(写真 13) 応永 17 年 (1410) 五輪塔全体



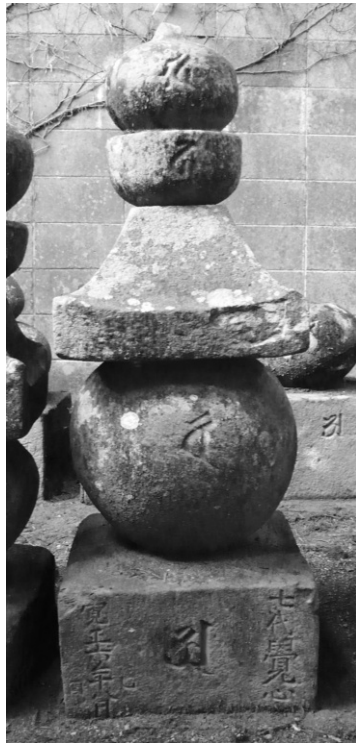
(写真 14) 応永 17 年 (1410) 五輪塔地輪



(写真 15) 嘉吉 3 年（1443）五輪塔全体



(写真 16) 嘉吉 3 年（1443）五輪塔地輪



(写真 17) 寛正 6 年 (1465) 五輪塔全体



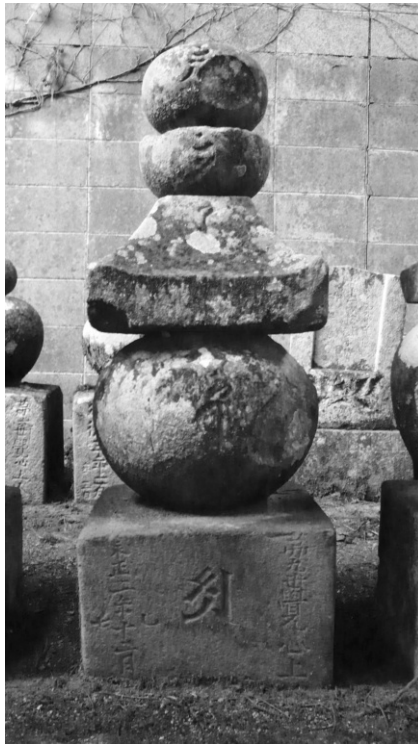
(写真 18) 寛正 6 年 (1465) 五輪塔地輪



（写真 19）延徳 3 年（1491）五輪塔全体



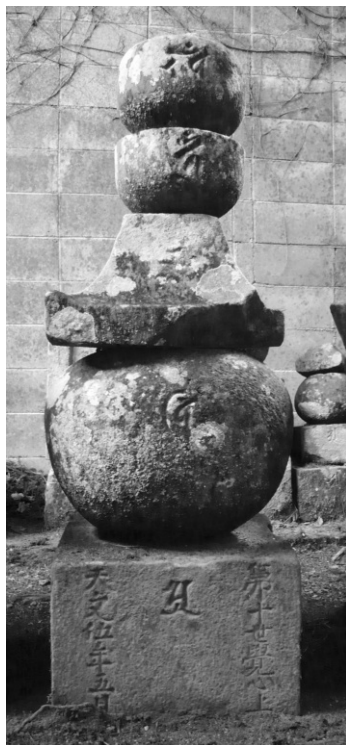
（写真 20）延徳 3 年（1491）五輪塔地輪



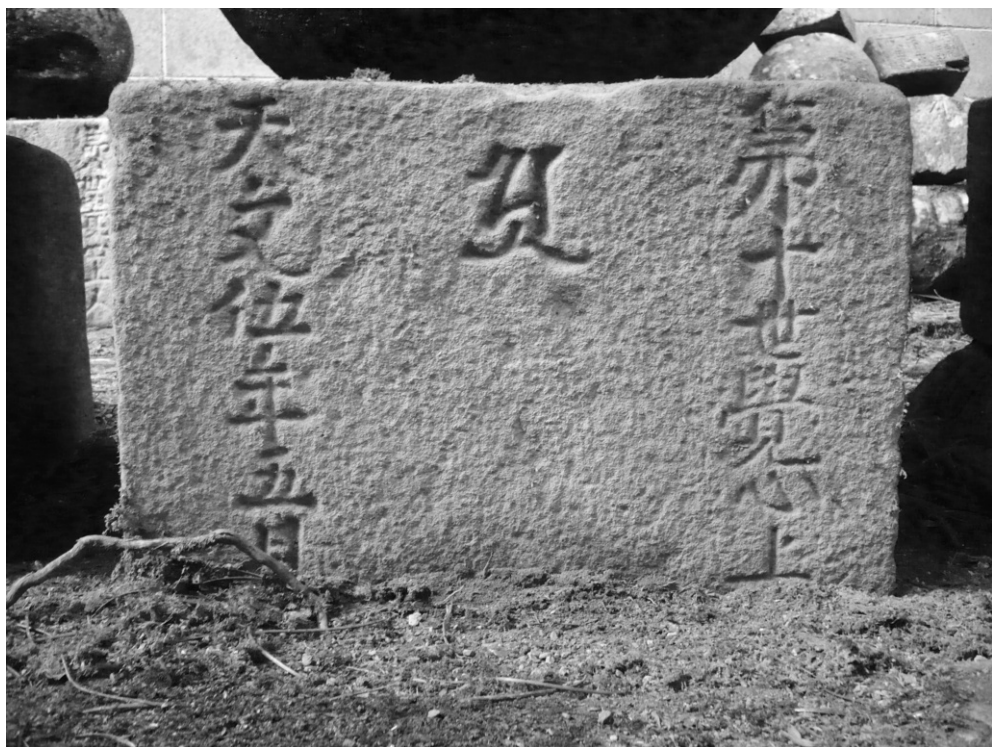
(写真 21) 永正 2 年 (1505) 五輪塔全体



(写真 22) 永正 2 年 (1505) 五輪塔地輪



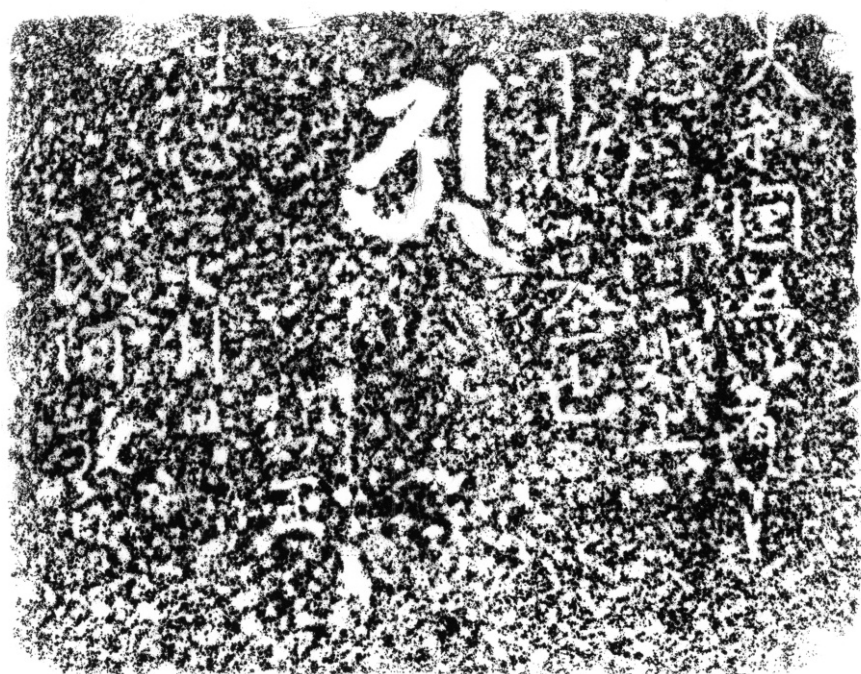
(写真 23) 天文 5 年 (1536) 五輪塔全体



(写真 24) 天文 5 年 (1536) 五輪塔地輪



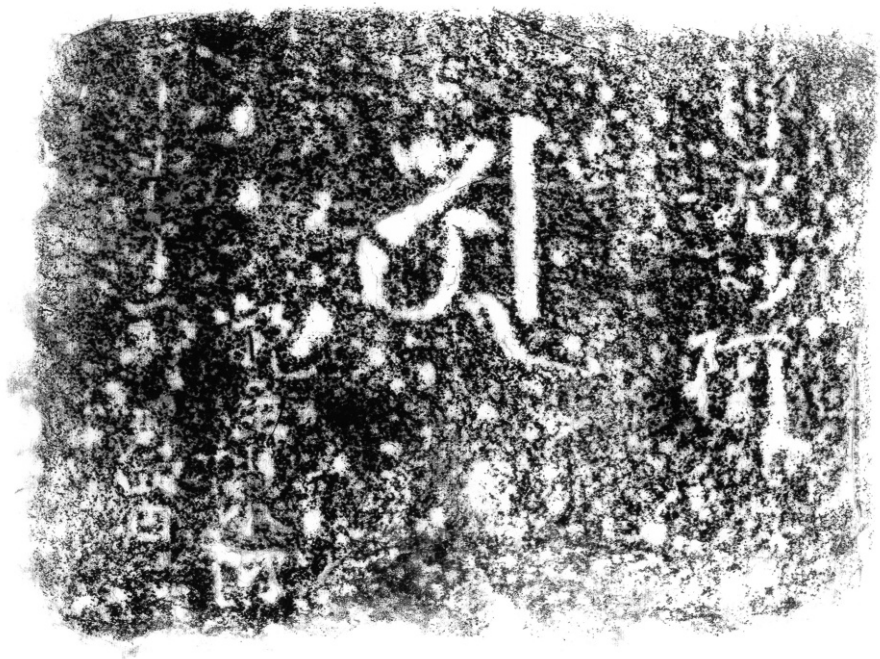
(写真 25) 大和国箸尾荘惣墓五輪塔地輪



(拓影 1) 大和国箸尾荘惣墓五輪塔銘文



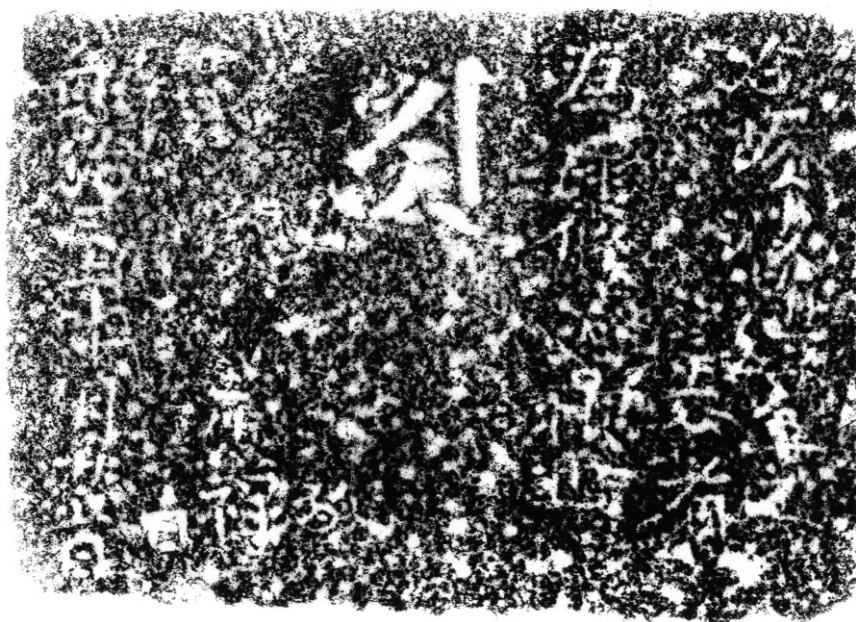
(写真 26) 康永 2 年（1343）五輪塔地輪



(拓影 2) 康永 2 年（1343）五輪塔銘文



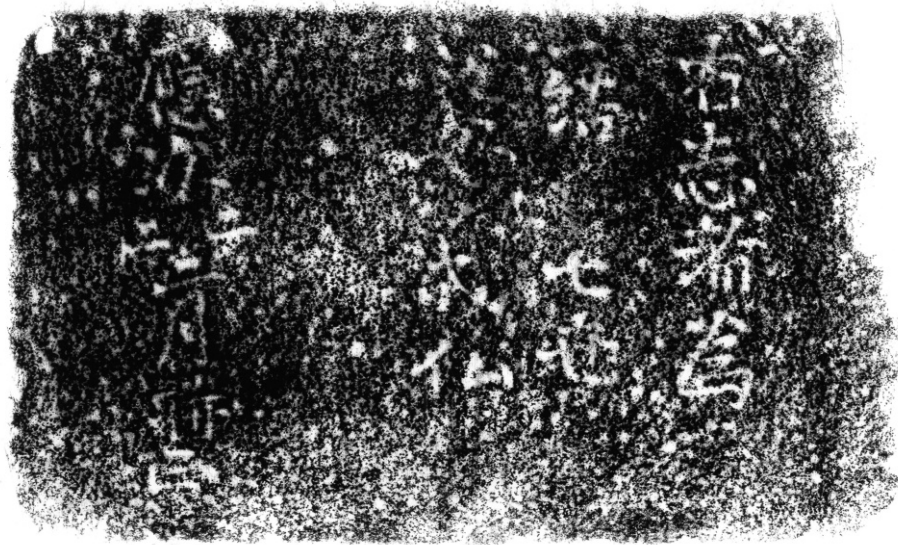
(写真 27) 貞治 3 年 (1363) 五輪塔地輪



(拓影 3) 貞治 3 年 (1363) 五輪塔銘文



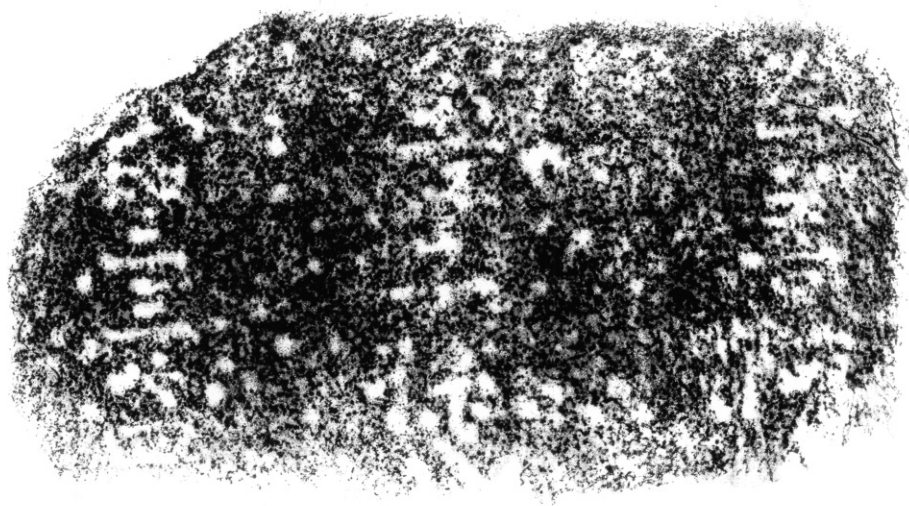
（写真 28）応安 4 年（1371）宝篋印塔基礎



（拓影 4）応安 4 年（1371）宝篋印塔銘文



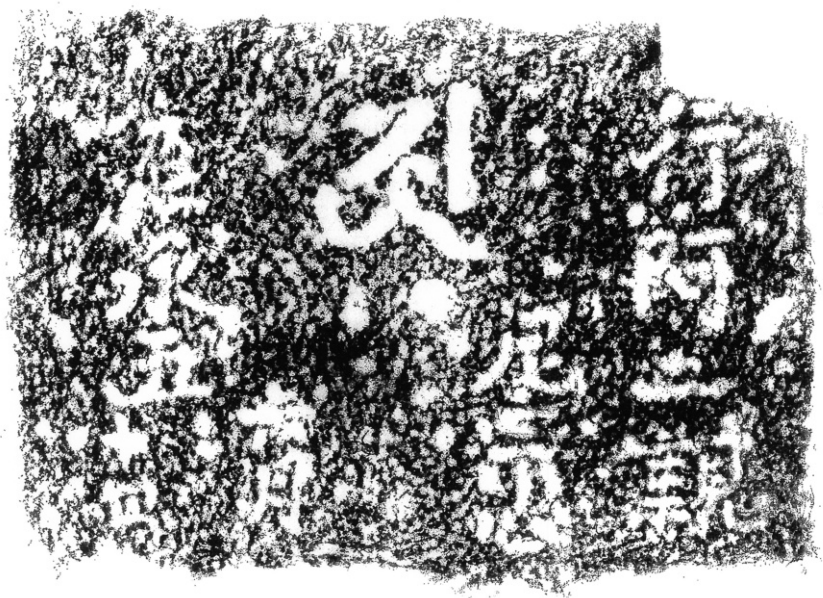
(写真 29) 永和 2 年 (1376) 宝篋印塔基礎



(拓影 5) 永和 2 年 (1376) 宝篋印塔銘文



(写真 30) 応永 5 年 (1398) 五輪塔地輪



(拓影 6) 応永 5 年 (1398) 五輪塔銘文



(写真 31) 応永 23 年 (1416) 五輪塔地輪



(拓影 7) 応永 23 年 (1416) 五輪塔銘文



（写真 32）文安元年（1444）五輪塔地輪



（拓影 8）文安元年（1444）五輪塔銘文



(写真 33) 永正 9 年 (1512) 宝篋印塔基礎



(拓影 9) 永正 9 年 (1512) 宝篋印塔銘文